「思い出の一端」（抜粋・編集）　初代校長　高井三郎

大正時代の手師学尋常小学校での思い出

（注：大正６年５月14日、手師学特別教授場から手師学尋常小学校に改称
高井三郎　大正７年６月１日～大正12年８月31日
大正７年　手師学附属隈川教授場設置、通学区分離）

（略）校庭に大きな桂の木があり、遠くから学校の位置を示してくれた。休み時間には子どもたち３～４人とその大木を囲んで色々な教訓を話したあの桂の木は懐かしい。

その当時、教科書（国定）購入のため常呂村市街の山田書店（注：山田開進堂）まで歩いて行ったものです。１冊の価格は５銭くらいだったと思う。途中の道が悪く、山田さんにお願いし、馬で手師学（日吉）まで１日がかりで来てもらい、熊の心配もいくらか楽になりました。

熊といえば、夕方風呂に入っていると、毎日決まったように鳴き声が聞こえてきた。はじめは大きな「犬の遠吠えだ」と思っていましたが、吉村さんという人に犬ではなく熊だよと言われて急に寂しくなったが、子どもたちの登下校のことが気になり、兄弟や近所の子どもたちと集団で行動するよう強く話をした。

その頃の子どもたちは、道を歩きながらでもヤマブドウを取ってきたといって、よく事務室に持ってきてくれた。学校といっても事務室１、教室１で、読み方、算術、修身、唱歌、体操などと分かれていたが、唱歌などは私が歌った後に続いて歌う本当の唱歌で、オルガンも小さいのが１台あったと記憶しているが、音のでない鍵盤があって、今の人から見るとこっけいなことと思うでしょうが、当時はそれなりに指導案を書いて授業をしたものです。子どもたちも実に素直で良く働き、がまん強く、60年の立派な歴史の基になっていることと思います。（略）

『日吉小学校60周年・日吉中学校20周年記念誌』（昭和42年11月発行）掲載